



マダガスカルで意見交換した「エコロジーオンライン」のメンバーと現地住民

マダガスカルの森再生を

現地住民と意見交換

佐野のNPO法人

【佐野】過度な森林伐採が問題化しているアフリカ大陸南東の島国マダガスカルで森の再生を目指すNPO法人「エコロジーオンライン」（植上町、上岡裕理理事長）は6月15〜23日、同国の4都市を訪問し、住民らと意見交換を行った。上岡理事長は「現地のニーズを踏まえて技術やノウハウを提供し、環境を守りながらエネルギー活用を担う人材を育てたい」とし、11月にバイオガスやエコ燃料などの講座を開講する考えだ。

（市川佳祐）

ニーズ把握、技術提供へ

同国では人口増加で調理用の薪や炭の需要が高まり、ここ30年で森林が激減。上岡理事長によると、かつて山や森林は国土面積の約80%を占めたが、現在は約7%にとどまるといふ。このため村周辺で

山崩れが頻発するなど生活に大きな悪影響を及ぼしている。森の再生は喫緊の課題だ。

同NPO法人は県内企業を中心に資金面で協力してもらおう「チームマダガスカル」への参加を呼び

11月にエコ燃料講座

掛けるなど、同国支援への準備を進めてきた。今回は同国の現状や現地のニーズなどを把握するため訪問。首都アンタナナリボやアンチラベ、サカイなどの都市部や地方など4都市を訪ね、地域の大人だけでなく、農業系専門学校生や小学生とも意見交換を行った。動物のフンからバイオガスと呼ばれる燃料を取り出すワークショップなども実施し、現地住民からは「バイオガスは自宅でもやれるか」などの相談があった。また現地の有識者からは、同国の森林破壊を憂慮する声も聞かれたという。こうした声を受け、11月に「里山エネルギースクール」を開講。①牛や豚などのフンを使ったバイオガス②オガクスのエコ燃料③ソーラーパネルの活用などを薪や炭に替わる「里山エネルギー」と位置づけ、国内での普及を進めていくという。